

ナ=チャン諸語の「太陽」に関する一考察

白井 聡子

キーワード：チベット=ビルマ語派、ナ=チャン語支、地理言語学、言語接触、翻訳借用

1 序論

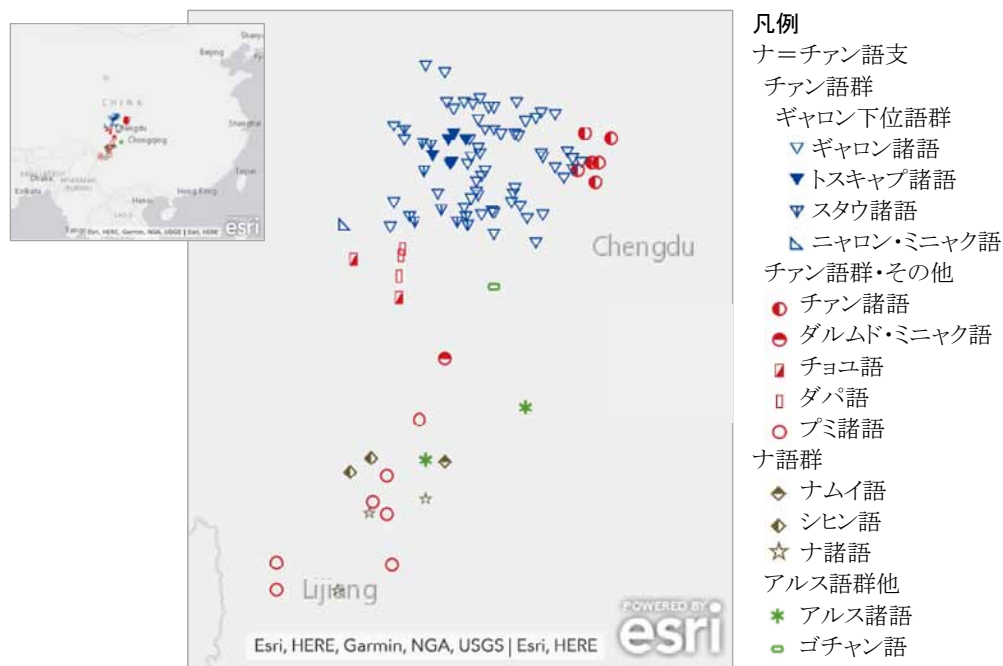


図1：ナ=チャン諸語

1.1 本論文の内容と目的

本論文は、中国西南部の川西民族走廊¹地域で話されるナ=チャン諸語（図1²）を対象として、「太陽」を意味する語彙に関する地理言語学的分析を行う。わずか一語彙に関するものではあるが、長い言語接触を背景に持つ言語群における言語史の複雑さを示すとともに、その解明への端緒となること

¹ 費 (1980) が言及した四川省西部を中心とする多民族地帯に対する、孫 (1983) による名称。近年、「蔵(羌)彝走廊」の名称でも言及されている (石主編 2009, 張・黄主編 2015)。

² 先行研究および筆者の現地調査において記録のある方言の地点を特定し、Jacques and Michaud (2011: Online Appendix 6; 本論文の図2に掲載) の系統樹を基に分類した上で地図上に示した。言語名については Roche and Suzuki (2017) を参照した。地点および言語名の特定に当たっては鈴木博之氏の協力を得た。

を期待している。

本論文では、まず、「太陽」を表す語彙を収集し、語彙形式に基づいて分類を行った上で、語源に関する初歩的考察を行う。その上で、地理的分布と相対的年代について分析を行う。言語資料として、筆者の現地調査で得た一次資料と、先行研究に基づく二次資料の両方を用いる（表1「資料」欄を参照）。二次資料を含むため、データの表記や音韻分析には調査者の違いに起因するばらつきが含まれる。このことから、本論文での議論に当たっては、差異の明確な語彙形式の類型を主に扱うこととし、音声・音韻面の変異は問題にしない。

1.2 ナ=チャン諸語について

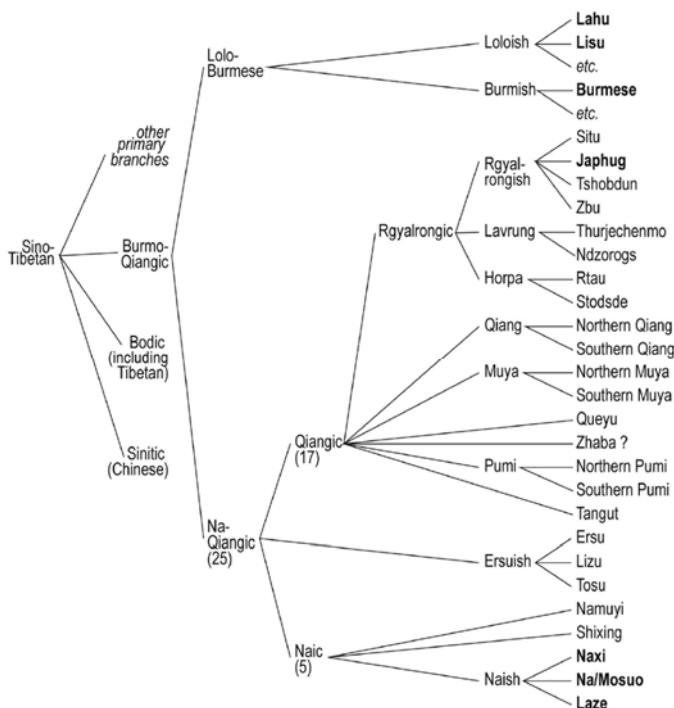


図2 : Jacques and Michaud (2011: Online Appendix 6) の系統樹

本稿で扱うナ=チャン諸語に含まれる言語は、ナ=チャン語支 (Na-Qiangic) と呼ばれる言語グループとほぼ一致する。ナ=チャン語支は、シナ=チベット語族の下位語支で、その位置づけおよび下位分類については今なお議論が続いている。Jacques and Michaud (2011: Online Appendix 6) の系統樹においてはビルマ=チャン語派 (Burmo-Qiangic) の下位に置かれている (図2)。従来標準的に用いられることが多かった Matisoff (2003) の分類においては、シナ=チベット語族チベット=ビルマ語派 (Tibeto-Burman) のタンゲート=チャン語支 (Tangut-Qiang) とロロ=ビルマ語支ナシ諸語 (Naxi; ナ

諸語 (Naish) に対応) に分けられている。また、Chirkova (2012) のように、これらの言語群を系統的グループと見なすことに否定的な研究もある。本論文では、系統論に関する議論は行わないが、Jacques and Michaud (2011) がナ=チアン語支とする諸言語に語彙や形態上の特徴が共有されていること、および、分布地域が地理的に連続していることを踏まえ、便宜上、ナ=チアン諸語と呼ぶことにする。下位分類についても便宜上 Jacques and Michaud (2011) を踏襲するが、この言語群が系統的グループか地域的グループかについての結論は保留する³。

1.3 先行研究

ナ=チアン諸語を含むチベット=ビルマ語派の地理言語学的研究については、筆者を含むグループが携わった一連の研究(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究課題「アジア地理言語学」)がある。そのうち、「太陽」については、Shirai et al. (2016) と Shirai (2017) がチベット=ビルマ語派全体の地理言語学的分析を行っている。しかし、ナ=チアン諸語については、この言語群が分布する地域に様々なタイプが見られることを間接的に示したのみで、詳細な言及はない。このほか、東部チベット文化圏 (Eastern Tibetsphere) のチベット語諸方言における「太陽」の地理言語学的研究として、Suzuki (2016) がある⁴。

川西民族走廊諸語と呼ばれる言語群は、ナ=チアン諸語がその大部分を占める⁵。その地理言語学的分析としては、基礎的代名詞を扱った Shirai (2018) があり、基礎語彙においても言語接触の影響が見られることを指摘している。

2 「太陽」の地理言語学的分析

2.1 「太陽」を表す語彙形式

まず、本研究で分析対象とする、ナ=チアン諸語の「太陽」を表す語彙形式を表1に示す。次節で議論する分類についても、「タイプ」列に付記しておく。語彙形式の表記は原則として資料のままだが、便宜上、声調を表す数字については上付きではなく通常の数字を用いた(例:南部プリンミ語箐花方言 (Qinghua Southern Prinmi) の形式は元の資料では by⁵⁵ と表記されるが表1では by55 となっている)。また、同一方言内に異なるタイプの語彙形式が報告されている場合は、行を分けて示した(例:ジャプク語干木鳥方言 (Ganmuniao Japhug) の ɤmbyi と tɤŋe) ⁶。

³ ただし、下位分類のうちギャロン下位語群 (rGyalrongic) については、Sun (2000) に基づき、系統的グループであると考えられる。

⁴ 東部チベット文化圏はナ=チアン諸語の分布地域を含んでおり、ナ=チアン諸語の多くがチベット語の影響を受けている。

⁵ Shirai (2018) 等の川西民族走廊諸語には、系統上はチベット語に近いペマ語も含まれる。

⁶ ニャロン・ミニャク語 (Nyagrong Minyag) の 'je⁴bə と 'jbə のように、同一タイプの異形式と思

表1 ナ=チァン諸語の「太陽」

方言・言語	「太陽」	タイプ	資料
チァン語群—ギャロン下位語群—ギャロン諸語			
Ribu Zbu	ta'nɲi	A-ii	Nagano & Prins 2013
Geletuo Zbu	ta'ɲi	A-ii	Nagano & Prins 2013
Caodeng Tshobdun	tə55 ɲE33	A-ii	Nagano & Prins 2013
Ganmuniao Japhug	ɤmbyi	B	Jacques 2008
〃	tɤɲe	A-ii	〃
Shaerzong Japhug	tɤɲe	A-ii	Nagano & Prins 2013
Mbola Situ	kə-jam	D	Shirai (fieldnotes)
Shashiduo Situ	'kəjam	D	Nagano & Prins 2013
Rangkou Situ	kə'jam	D	Nagano & Prins 2013
Yoci bTsanlha	kəŋi	A-i	Shirai (fieldnotes)
チァン語群—ギャロン下位語群—その他			
Yelong Khroskyabs	ɤbyi53	B	Huang B. 2007
Guanyinqiao Khroskyabs	ɲnə55	A-i	Huang B. 2007
Puxi sTodsde	ɤbjə	B	Nagano & Prins 2013
Wobzi Khroskyabs	jnə	A-i	Nagano & Prins 2013
Erkai sTau	namtsa	A-iv	Nagano & Prins 2013
Daofu sTau	ɤbə	B	Huang 1992
Geshitsa sTau	wbə	B	Duo'erji 1998
Nyagrong Minyag	'je ʰbə / 'jbə	B	Nagano & Prins 2013
チァン語群—その他			
Yadu Northern Qiang	mujuq	D	LaPolla 2003
〃	məsi	C	〃
〃	məsaq	C	〃
Mawo Northern Qiang	mun	A-i	Liu 1998
Longxi Southern Qiang	mù ɛi	C	Evans 2001
Taoping Southern Qiang	ma33 sɿ55	C	ZMYC
Puxi Southern Qiang	mesə	C	Huang C. 2007
Mianchi Southern Qiang	mè si	C	Evans 2001
〃	mè nò	A-i	〃
Mätro nDrapa	ɲɤme1	A-iii	Shirai (fieldnotes)
Zhatuo nDrapa	ɲɤ55 mi55	A-iii	Huang 1992
Kalakhe nDrapa	ɲɤ55me55	A-iii	Shirai (fieldnotes)
Waduo nDrapa	ɲə55 mɿ55	A-iii	Gong 2007
Nyato nDrapa	ɲə55me55	A-iii	Shirai (fieldnotes)
Youlaxi Choyu	pu55	B	Huang 1992

われる語彙は同一行内に示してある。

Lhagang Choyu	ˈmi tsi / ˈmi ʰtsi	C	Suzuki & Sonam W. 2018
Gala Choyu	ˈɟumə	A-iii	Nagano & Prins 2013
Darndo Minyag	nɔ̄24	A-i	Huang 1992
Sanyanglong Northern Prinmi	bu53	B	Lu 2001
Taoba Northern Prinmi	bu55	B	Lu 2001
Tuoqi Northern Prinmi	bu53	B	Lu 2001
Zuosuo Northern Prinmi	bu53	B	Lu 2001
Xinyingpan Central Prinmi	bi ^H	B	Ding 2014
Ludian Southern Prinmi	by55	B	Lu 2001
Qinghua Southern Prinmi	by55	B	Lu 2001
<hr/>			
ナ語群			
Luobo Namuyi	ŋi55mi55	A-iii	Yin 2016
Upper Shihing	ŋe53mi33	A-iii	Huang 1992
Yongning Na	ɲiɬmiɬ	A-iii	Michaud 2015
Laze	ŋiɬmieɬ	A-iii	Michaud & Jacques 2012
Western Naxi	ŋi33me33	A-iii	Huang 1992
<hr/>			
アルス語群他			
Zela Ersu	ŋo55ma55	A-iii	ZMYC
Lizu	ŋi33mi53 / ŋi33me53	A-iii	Huang 1992
Maibeng Gochang	mi31tshə55	C	Huang 1992
Qianxi Gochang	mintshə	C	Jiang 2015

「太陽」は、Swadesh (1971) をはじめとするほとんどの基礎語彙リストに含まれていることから明らかのように、一般言語学的観点からはかなり基本的な語彙と考えられており、同系言語において同源語が保持されていることが期待される。チベット＝ビルマ語派の比較言語学的研究においても、Matisoff (2009) が “stable roots” の一つに挙げている。ところが、表 1 から、ナ＝チエン諸語においては語彙のバリエーションが非常に大きく、様々な語源を持つ形式が混在していることが分かる。以下の節では、表 1 のデータを用いて議論を進める。

2.2 分類および語源に関する考察

本節ではまず、表 1 に示した語彙形式の分類を試みる。語彙形式が多様であるため、まず、音節初頭子音のタイプを元に、[A] N-, [B] B-, [C] M-TS-, [D] J- の 4 つに大きく分けることを提案したい。その上で [A] を [A-i] (Prefix-)n-, [A-ii] Prefix-ŋ-, [A-iii] ŋ-m-, [A-iv] n-ts- の 4 つに下位分類する。それぞれの例については、表 1 を参照していただきたい。

Shirai (2017: 35) では、チベット＝ビルマ語派の「太陽」を表す語彙に見られる主な語幹を、[1] *nəy, [2] B-, [3] M-, [4] *gnam, [5] Gl-, [6] J-, [7] TS-, [8] *riŋ の 8 タイプに分類した。本論文の分類の内、[A-i～iii] は Shirai (2017: 35) の [1] に、[A-iv] は [4]+[7] の複合タイプに、[B] は [2] に、[C] は [3]+[7]

の複合タイプに、[D] は [6] に、それぞれおおむね対応する。つまり、[5] と [8] を除く 6 種類の語幹がナ=チエン諸語に見られることになる。この状況は、仮に「ナ=チエン語支」という系統的グループが建てられるとすれば、基礎語彙としてはかなり多様であると言える。Shirai (2018) でも指摘したように、この地域には非常に深く長い言語接触の歴史があることから、このような語彙的多様性の背景には言語接触による変容もあると考えるのが妥当であろう。

以下では、分類の妥当性を検証するために、[A]N- タイプについて最近の調査で新たに得られた知見を中心に、それぞれのタイプについて考察する。

2.2.1 N- タイプ

[A]N- タイプは、主に、チベット=ビルマ祖語 (Proto-Tibeto-Burman; PTB)⁷の *(s-)nəy ‘sun / day / dwell’ に遡ると考えられる (後述のように、一部、*g-nam ‘sun / sky’ に遡る形式も含まれる)。PTB *(s-)nəy は、中国語の“日”(OC *ńi̯ət*) とも同源と考えられ、(Matisoff 2003: 201, 464)、非常に広く分布する形式である。以下では、[A-i~iv] の下位分類に沿って詳しく見ていく。

[A-i] は、語幹初頭子音が歯茎鼻音 *n* を持つタイプで、PTB *(s-)nəy がナ=チエン系言語において引き継がれた形式である可能性が高い。チエン語群全体に散見される。ツェンラ語ヨチ方言 (Yoci bTsanlha) *kəŋi* については、母音が前舌高母音に変化したのに伴って口蓋化し *ŋ* になったと考えられる (*kə-* はおそらく接頭辞)⁸。北部チエン語麻窩方言 (Mawo Northern Qiang) *mun* は、Evans (2001: 306) の南部チエン祖形 ‘sky’+*nə-* と対応する形式で、PTB **r-məw* ‘sky / heavens / clouds’ と *(s-)nəy に遡る語幹の複合形式から第二音節が弱化したものと考えられる。同方言には *mutup*「空」、*mərgu*「雷」といった気象に関する語彙に **r-məw* に由来する形態素 *mu-/mə-* が見られ、接頭辞化していると考えられることから、ここに分類した。

[A-ii] は、接頭辞 *tV-* を伴い、語幹初頭に軟口蓋鼻音 *ŋ* が現れ、母音は前母音である。ギャロン諸語にのみ見られる。STEDT において、PTB *(s-)nəy に比定されている。

⁷ 本論文で用いる PTB の再構形は、すべて、オンラインデータベース STEDT (The Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus) に依拠する。

⁸ ツェンラ語ヨチ方言 *kəŋi* については、**g-nam* ‘sun / sky’ に遡る可能性も考えられる。同方言の「空」は *tə-morŋi* であり、最終音節の形式が「太陽」と一致するが、語義を考えると、「空」の最終音節は **g-nam* ‘sun / sky’ に遡る可能性が高く、*(s-)nəy ‘sun / day / dwell’ と結びつく可能性は低い。brightening (**a* の高母音化: Matisoff 2004 参照) と末子音脱落により **g-nam* > *ŋi* という変化が起きた可能性がある。「太陽」の語幹 *ŋi* もまた、同じ語源に遡る可能性が否定できない。しかし一方で、「太陽」の語幹 *ŋi* が PTB *(s-)nəy から変化した可能性も十分に考えられる。PTB **-əy* > ツェンラ語ヨチ方言 *-i* という対応も見られるからである: 例えば、**səy* ‘die’ > *kə-ŋi* 「死ぬ」; **b-ləy* > *kə-pli* 「四」(*kə-* はいずれも接頭辞)。また、STEDT において、ツェンラ語を含め、ギャロン語群の「太陽」を表す語に見られる *ŋi* ないし *ni* は PTB *(s-)nəy に比定されている。以上のことから、本論文では、暫定的に、*(s-)nəy に遡るという仮説を採用しておく。トスキャブ語の観音橋方言とウオプズィ方言 (Guanyinqiao Khroskyabs, Wobzi Khroskyabs) についても同様に考えておく。

[A-iii] はいずれも二音節語で、第一音節初頭子音は後部歯茎～軟口蓋の鼻音で、第二音節初頭子音は m である (NVmV)。ギャロン下位語群には見られないが、それ以外の各グループに散見される。ナ諸語はすべてこのタイプを持つ。このタイプの語形はチベット＝ビルマ語派の中ではチベット語諸方言とその周辺地域にのみ見られることから、古チベット語 (g)nyi-ma (チベット文語 nyi-ma) に起源を持つ形式である可能性が高い。つまり、ナ＝チエン諸語においてはチベット語からの借用であると考えられる。しかし、チベット語から語形式を直接借用したと考えるには問題がある。Suzuki (2016: 79) によると、東部チベット文化圏のチベット語方言に見られる類似タイプ (ŋVmV) の形式としては、[ŋi ma], [ŋə ma] [ŋi mɜ], [ŋə mo] などがある。第一音節については、ラゼ語 (Laze) ŋiɬmieɬ のように初頭が ŋ であるものや、アルス語 (Zela Ersu) ŋo55ma55 のように円唇母音を持つチベット語方言は見られない。さらに、第二音節の母音が多く、ナ＝チエン諸語において前舌高～中高母音で、チベット語と一致しない (例：ダバ語メト方言 (Mätro nDrapa) ŋɬmeɬ, ナ語永寧方言 (Yongning Na) piɬmiɬ, リズ語 (Lizu) ŋi33mi53)。ナ＝チエン諸語には祖語の *a が前舌化・高母音化する brightening と呼ばれる音変化が見られるため (Matisoff 2004)、その影響を受けている可能性が考えられるかもしれない。しかし、借用語であるとすれば音変化が固有語なみに進んでいるという点に不自然さがある⁹。

この語彙について、筆者がダバ語方言の語彙調査をしていた際に、ニャト方言とカラケ方言それぞれの話者から、「太陽」という言葉は「火」と「母」から成っている」とのコメントを別々に得た。これは民間語源であるが、柴田 (1977: 13) が「(言語地理学は) 話者の内省をも利用する」と明言しているように、この「火」と「母」の複合語である可能性についても検証しておきたい。

表2 「太陽」、「火」、「母」

言語名	「太陽」	「火」	「母」	備考
Mätro nDrapa	ŋɬmeɬ	ŋɬ3	me3	ŋɬ3 「昼間」
Gala Choyu	'ɲimə	ma	ʔə'mə	—
Upper Shihing	ŋe53mi33	ŋɜ35	a55mi53	ŋi55læ33ku55 「昼間」
Luobo Namuyi	ŋi55mi55	mi53	a55mi55	ŋi55 「昼間」
Laze	ŋiɬmieɬ	mvɬ	æɬmieɬ	ŋiɬ 「～日」
Yongning Na	piɬmiɬ	mvɬ	əɬmiɬ	piɬ 「～日」
Western Naxi	ŋi33me33	mi33	ə21me33	ŋi33 「～日」
Zela Ersu	ŋo55ma55	me55	a55ma55	ŋo55 「～日」

表2は、[A-iii] タイプの形式を持つ主な言語について、「太陽」、「火」、「母」の形式を列挙したも

⁹ ダバ語メト方言において、チベット語 bla-ma 「高僧」の借用形式は lemeɬ であり、ŋɬmeɬ 「太陽」の第二音節と比べると brightening の進行に差がある。

のである。「太陽」の第一音節と「火」を比較すると、ダバ語以外では形式が一致しない。「火」の形式はいずれも PTB *mey に遡ると考えられる(ダバ語メト方言とシヒン語上流域方言 (Upper Shihing) 以外は初頭の *m を保持している)。ダバ語において「日」と「太陽」の第一音節が一致するのは、音形式の合流 (merger) である可能性が高い¹⁰。従って、[A-iii] タイプの第一音節が「火」であるという説は却下しなければならない。一方、「太陽」の第二音節と「母」の語幹(表2のダバ語以外の言語はいずれも親族名称の接頭辞を伴っている)を比較すると、チョユ語呷拉方言 (Gala Choyu) で母音が異なる以外、非常に良く一致することが分かる。さらに、表2の備考欄に示したように、これらの言語では「太陽」の第一音節と「昼間、日中」ないし「～日」の形式が一致することが多い¹¹。ただし、チョユ語呷拉方言ではいずれも一致しない (na'zu 「昼間、日中」; mə 「～日」)。ここで、チベット文語の形式 nyi-ma について考えると、第二音節 ma は名詞接尾辞の一つであるが、「母」を意味する語幹も同形である¹²。一方、第一音節の nyi は「太陽」ないし「日」を表す語幹であり、「火」(チベット文語 me) とは関係ない。

以上のことから、[A-iii] タイプの多くは第一音節に「昼間」ないし「～日」を意味する語幹、第二音節に「母」を意味する語幹を持つ複合形式であると結論づけられる。類似する ηVmV タイプの形式がチベット語とその周辺に偏って分布することも併せて考えると、ナ=チャン諸語におけるこの [A-iii] タイプは、チベット語からの翻訳借用である可能性が高い。つまり、恐らくは、東部チベット文化圏(の一部)において、チベット文語 nyi-ma の対応形式が、「太陽/日」と「母」の複合語であると再解釈された。これに影響を受けたナ=チャン諸語が、固有の「太陽」ないし「日」「昼間」を意味する語幹 (PTB *(s-)nəy) と「母」(PTB *ma) を意味する語幹の複合形式で「太陽」を表すようになったと考えられる。ただしこれにはチョユ語のような例外もある。チョユ語の「太陽」は、チベット語から直接借用した形式と考えるのが妥当だろう。

[A-iv] は今のところスタウ語アルカイ方言 (Erkai sTau) namtsa の一例のみである。複合語と考えられ、それぞれの語幹の祖形としては PTB *g-nam 'sky' と *tsyar 'sunshine' が候補に挙げられる。つまり、暫定的に N-タイプに分類したが、[A-iv] のみ、[A-i~iii] の N-形態素 (< PTB *(s-)nəy) とは異なる祖形に遡る可能性がある。Suzuki (2016) によると、これに似た /na *tsa/ という形式を持つチベット語方言があるが、古チベット語/チベット文語との対応は明らかではない。また、地理的に、

¹⁰ ダバ語においては、PTB *r-mey :: ηΛpɿti 「尾」(ηΛ と pɿti の複合形式) にも見られるように、PTB *mey > ηΛ は規則的な変化と考えられる。

¹¹ シヒン語上流域方言の「太陽」ηe53mi33 の第一音節と「昼間」ηi55læ33ku55 の第一音節は母音と声調が異なっているが、STEDT では、これらがともに PTB *(s-)nəy に比定されている。なお、「～日」を表す語は ma55 で、「太陽」や「昼間」とは形式が異なる。この後の議論がこの言語にも当てはまるかどうかは議論の余地がある。

¹² この点が、ナ=チャン諸語と異なっている。たとえばダバ語には、「母」と同形の名詞接尾辞はない。

東部チベット文化圏東端の非常に限られた地域にのみ見られると報告されており、東部チベット文化圏中部で話されるスタウ語アルカイ方言と直接の接触があったとは考えにくい。

2.2.2 その他のタイプ

前節では、[A] について、下位分類それぞれの詳細な検討を行った。本節では、残る [B]~[D] の各タイプについて述べる。

[B] は、語幹初頭子音に両唇閉鎖音が現れるタイプで、チアン語群に見られる。プリンミ諸語はすべてこのタイプを持つ。PTB *m-ba ‘shine / bright’ と関係している可能性がある。ギャロン下位語群以外のチアン語群がいずれも両唇閉鎖音+母音のシンプルな形式を持つ一方で（例：南部プリンミ語箒花方言 by55）、ギャロン下位語群ではいずれも初頭子音連続が見られ（ジャプク語干木鳥方言 ꞑmbyi; ストゥデ語蒲西方言 (Puxi sTodsde) ꞑbjə; スタウ語ゲシツァ方言 (Geshitsa sTau) wbə; ニャロン・ミニャク語 (Nyagröng Minyag) ꞑje ꞑbə / ꞑjbə など）、何らかの形態素が接頭ないし複合していると考えられる。しかしここでは、大まかな分布を見ることを目的として、暫定的に一つのタイプにまとめておく。

[C] は二音節形式で、第一音節の初頭子音が両唇鼻音、第二音節の初頭子音が歯茎破擦ないし歯茎摩擦音というタイプである。ギャロン下位語群以外のチアン語群とゴチャン語の各方言に見られる。第一音節は PTB *r-məw ‘sky / heavens / clouds’ に、第二音節は PTB *tsyar ‘sunshine’ にそれぞれ遡る可能性がある。つまり、「空」+「陽光」という語構成である。前節で [A-i] タイプの北部チアン語麻窩方言について述べたように、第一音節が接頭辞化している可能性もある。

[D] は語幹初頭に接近音 j を持つタイプで、ギャロン諸語のストゥ語 (Situ) 各方言と北部チアン語雅都方言 (Yadu Northern Qiang) にのみ見られる。前者は接頭辞 kə- を伴い、後者は第一音節に mu-（おそらく PTB *r-məw ‘sky / heavens / clouds’ に遡る形態素）を持つ。北部チアン語の語末に見られる子音 q は他の形態素に由来する可能性がある（語末音節の弱化）。いずれも語幹の祖形は未詳である。Jacques (2008: 45-46) によると、ストゥ語に見られるこのタイプの形式の原義は「晴れていること」と解釈される。接頭辞 kə- は状態動詞を名詞化するもので、語幹 jam はジャプク語の jum 「晴れている」に対応するという。

2.3 各タイプの地理的分布

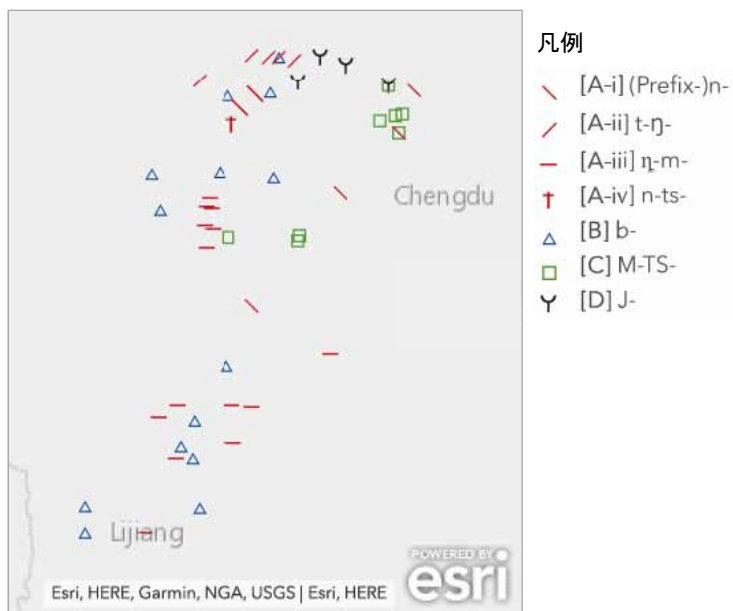


図2 ナ=チャン諸語の「太陽」

前節で述べた分類に基づく分布地図を図2に示す。以下では地理言語学的観点から相対的年代について考察を試みる。

[A]～[D]の大分類の中では[A]が地理的に最も広く分布している。下位分類ごとに見ると、[A-i]は北部にやや偏って分布し、[A-ii]は北端のごく限られた地域に見られる。[A-iv]は一地点のみである。[A-i, ii, iv]の相対的年代はこの順であると考えるのが妥当だろう。[A-iii]はそれらよりも広く分布するように見える。しかし、前節で述べたように[A-iii]の多くはチベット語からの翻訳借用と考えられ、チベット語が伝統的にこの地域の共通語(*lingua franca*)として用いられてきたことも併せて考えると、柴田(1977: 18)が「標準語はいわば“空から降るように”広がる」と指摘しているように、より新しいにもかかわらず、不連続な広い地域に散在する可能性が示唆される。第一音節が固有語(「太陽/日/昼間」)を用いて翻訳借用された可能性を踏まえると、論理的には借用時点で同地点に[A-i]タイプの形式があったことになるため、[A-iii]は[A-i]より新しいタイプであると結論づけられる。また、仮に[A-iii]の翻訳借用タイプの地点がいずれも古い段階で[A-i]を持っていたとするならば、元々は[A-i]タイプが相当に広がっていたという可能性が示唆される。

地理言語学的観点からは、[B]も北西部から南部にかけて広く分布しており、かなり古いタイプであると考えられる。分布地域から言えば[A-iii]よりも広い。また、[A-iii]と地理的に混在している背景には、前述のように[A-iii]が「空から降るように」散発的に広がった可能性が考えられる。た

だし、系統論の仮説 (Jacques and Michaud 2011) と併せて検討すると、[A-i~iii] がすべての語群に見られるのに対し、[B] はチアン語群のみで、ナ語群、アルス語群等には現れない。暫定的仮説として、[B] は [A-i] より新しく [A-iii] より古いとしておく¹³。

[C] の分布地域は [A-i] の分布地域の内側にある。従って、[A-i] より新しい形式であると考えられる。また、地理的に概ね連続していることや、[B] より分布地域が狭いことから、[B] よりも新しい形式であることが示唆される。

[D] は北東端の限られた地域に分布しており、[C] よりもさらに新しい形式であると考えられる。このタイプは前節で見たようにスートゥ語と北部チアン語雅都方言に見られるが、地理的には連続していることが分かる。スートゥ語の原義が解明されていることから、北部チアン語雅都方言の形式はスートゥ語からの借用であると結論づけられる。

3 結語

本論文は、ナ=チアン諸語における「太陽」を意味する語彙について、形式の分類とその地理言語学的分析を試みた。

「太陽」は一般的に基礎語彙の一つとされるが、ナ=チアン諸語においては多様な形式が現れる。本論文では、主に音節初頭子音のタイプに基づき、それらを [A] N-, [B] B-, [C] M-TS-, [D] J- の4つに大きく分類し、さらに [A] を [A-i] (Prefix-)n-, [A-ii] Prefix-ŋ-, [A-iii] ŋ-m-, [A-iv] n-ts- の4つに分けることを提案した。

この分類について祖形および言語接触の影響も考慮に入れて検討した結果、以下の結論を得た。[A-i, ii] は PTB *(s-)nəy ‘sun/day/dwell’ に遡りうる形式である。[A-iii] は、一部を除いて、地域共通語であるチベット語の形式 (古チベット語 (g)nyi-ma の対応形式) が「太陽/日」(PTB *(s-)nəy) と「母」(PTB *ma) の複合語であると再解釈された上で、固有の「太陽」ないし「日」「昼間」を意味する語幹と「母」を意味する語幹の複合形式を用いて翻訳借用されたものと考えられる。[A-iv] は一例のみで、複合語と考えられ、PTB *g-nam ‘sky’ と *tsyar ‘sunshine’ に遡る可能性がある。[B] は、PTB *m-ba ‘shine/bright’ に遡る同源語の可能性がある。[C] は複合形式で、PTB *r-məw ‘sky/heavens/clouds’ と *tsyar ‘sunshine’ に遡る可能性がある。[D] はギャロン諸語において「晴れている」を表す状態動詞に名詞化接頭辞を付加した形式であり、北部チアン語雅都方言に見られるものは借用と考えられる。

以上のタイプについて、地理的分布を示し、地理言語学的分析を行った。その結果、[A-i] > [B] > [A-ii], [A-iii], [C] > [D], [A-iv] という相対的年代が仮定されることを示した。

¹³ さらに想像力を逞しくするならば、次のような仮説が考えられる：最初に、[A-i] タイプが広がっていた。そこに、[B] タイプが広がってきたが、[A-i] も保持されていた。最後に、[A-iii] タイプの翻訳借用が散発的に広がることで、[A] タイプが復活した。

謝辞

筆者の現地調査にご協力くださったインフォーマントの皆さんに心より感謝申し上げます。本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学」およびJSPS 科研費 17J40087, 18H05219 の成果の一部です。また、この論文の一部は 2017 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会（2018 年 3 月 29 日）での発表に基づいています。研究の機会と貴重なコメントをくださったすべての関係者に感謝申し上げます。

参照文献

- Chirkova, Katia (2012) The Qiangic subgroup from an areal perspective: A case study of languages of Muli. *Language and Linguistics* 13(1): 133-170.
- Ding, Picus Sizhi (2014) *A grammar of Prinmi: Based on the central dialect of northwest Yunnan*. China Languages of the Greater Himalayan Region. Leiden/Boston: Brill.
- Duo'erji [多爾吉] (1998) 《道孚語格什扎話研究》 北京：中國藏學出版社。
- Endo, Mitsuaki (ed.) (2016) *Studies in Asian geolinguistics I -SUN-*. Fuchu: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Evans, Jonathan Paul (2001) *Introduction to Qiang phonology and lexicon: Synchrony and diachrony*. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Fei, Xiaotong. [費孝通] (1980) 〈关于我國民族識別問題〉 《中國社會科學》 1980(1): 94-107.
- Gong, Qunhu [龔群虎] (2007) 《扎巴語研究》中國新發現語言研究叢書. 北京：民族出版社。
- Huang, Bufan [黃布凡] (2007) 《拉烏絨語研究》中國新發現語言研究叢書. 北京：民族出版社。
- Huang, Bufan (editor-in-chief) [黃布凡 (主編)] (1992) 《藏緬語族語言詞匯》 北京：中央民族學院出版社。
- Huang, Chenglong [黃成龍] (2007) 《浦溪羌語研究》中國少數民族語言方言研究叢書. 北京：民族出版社。
- Jacques, Guillaume [向柏霖] (2008) 《嘉絨語研究》中國新發現語言研究叢書. 北京：民族出版社。
- Jacques, Guillaume and Alexis Michaud (2011) Approaching the historical phonology of three highly eroded Sino-Tibetan languages. *Diachronica* 28: 468-498 (With online appendix, DOI: 10.1075/dia.28.4.02jac.additional).
- Jiang, Li (2015) *A grammar of Guiqiong: A language of Sichuan*. Leiden/Boston: Brill.
- LaPolla, Randy with Huang Chenglong (2003) *A grammar of Qiang*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Liu, Guangkun [劉光坤] (1998) 《麻窩羌語研究》中國少數民族語言方言研究叢書. 成都：四川民族出版社。
- Lu, Shaozun [陸紹尊] (2001) 《普米語方言研究》中國少數民族語言方言研究叢書. 北京：民族出版社。

- Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley/Los Angeles: University of California Press.
- Matisoff, James A. (2004) “Brightening” and the place of Xixia (Tangut) in the Qiangic branch of Tibeto-Burman. In: Y.-C. Lin et al. (eds.). *Studies on Sino-Tibetan languages: Papers in honor of Professor Hwang-Cherng Gong on his seventieth birthday*. Language and linguistics monograph series No. W-4. 327–352. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.
- Matisoff, James A. (2009) Stable roots in Sino-Tibetan/Tibeto-Burman. In: Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman historical linguistics*. Senri ethnological studies 75. 291–318. Suita: National Museum of Ethnology.
- Michaud, Alexis (2015) *Online Na-English-Chinese dictionary* (version 1.0). Paris: Projet HimalCo. (<http://himalco.huma-num.fr/dictionaries/SelectDictionary.php?dict=na>, accessed on August 31, 2018)
- Michaud, Alexis and Guillaume Jacques (2012) The phonology of Laze: Phonemic analysis, syllabic inventory, and a short word list. 《語言學論叢》 45: 196-230.
- Nagano, Yasuhiko and Marielle Prins (2013) rGyalrongic languages database. (<http://htq.minpaku.ac.jp/databases/rGyalrong/>, accessed on August 31, 2018).
- Roche, Gerald and Hiroyuki Suzuki (2017) Mapping the minority languages of the eastern Tibetosphere. In: Keita Kurabe and Mitsuaki Endo (eds.) *Studies in Asian geolinguistics VI: “Means to count nouns” in Asian languages*, 28-42. Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Shi, Shuo (editor-in-chief) [石碩 (主編)]. 2009. 《藏彝走廊：文明起源与民族源流》 成都：四川人民出版社.
- Shirai, Satoko (2017) A geolinguistic approach to Tibeto-Burman vocabulary: A case study of ‘sun’ and a future perspective. In: Hiroyuki Suzuki and Mitsuaki Endo (eds.) *Studies in Asian geolinguistics, Monograph No. 2, Proceedings of the workshop “Geolinguistic method and southeast Asian linguistics,”* 34-50. Fuchu: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Shirai, Satoko (2018) The possibility of borrowing basic pronouns in minority languages of the Western Sichuan Ethnic Corridor. *Tokyo University Linguistic Papers* 39: 265-285.
- Shirai, Satoko, Keita Kurabe, Kazue Iwasa, Hiroyuki Suzuki and Shiho Ebihara (2016) Sun: Tibeto-Burman. In: Mitsuaki Endo (ed.), 14-17.
- Sibata, Takesi [柴田武] (1969/1977) 『言語地理学の方法』 東京：筑摩書房.
- STEDT: The Sino-Tibetan etymological dictionary and thesaurus. (<https://stedt.berkeley.edu/~stedt/cgi/rootcanal.pl>, accessed on August 31, 2018).

- Sun, Hongkai [孫宏開](1983) 〈川西民族走廊地區的語言〉 In: 李鋒銘(編)《西南民族研究》 429-454. 成都: 四川民族出版社.
- Sun, Jackson T.-S. (2000) Parallelisms in the verb morphology of Sidaba rGyalrong and Guanyinqiao in rGyalrongic. *Language and Linguistics* 1(1): 161–190.
- Suzuki, Hiroyuki (2016) A geolinguistic description of terms for 'sun' in Tibetic languages of the Eastern Tibetosphere. In: Mitsuaki Endo (ed.), 79-85.
- Suzuki, Hiroyuki and Sonam Wangmo (2018) Lhagang Choyu wordlist with the Thamkhas dialect of Minyag Rabgang Khams (Lhagang, Dartsendo). *Asian and African Languages and Linguistics* 12: 133-160.
- Swadesh, Morris (author) and Joel Sherzer (ed.) (1971) *The origin and diversification of language*. Chicago/New York: Aldine-Athelton.
- Yin, Weibin [尹蔚彬](2016) 《納木茲語語法標註文本》中國民族語言語法標註文本叢書. 北京: 社會科學文獻出版社.
- Zhang, Xi and Chenglong Huang (editor-in-chief) [張曦、黃成龍(主編)] (2015) 《地域棱鏡: 藏羌彝走廊研究新視角》 北京: 學苑出版社.
- ZMYC: Zangmianyu Yuyin he Cihui Bianxiezu [《藏緬語語音和詞匯》編寫組] (1991) 《藏緬語語音和詞匯》 北京: 中國社會科學出版社.

(しらい さとこ・日本學術振興会/筑波大学人文社会系)

On “sun” in Na-Qiangic languages

Satoko Shirai

Keywords: Tibeto-Burman, Na-Qiangic, geolinguistics, language contact, calque

Abstract

This paper conducts a geolinguistic analysis of words that mean “sun” in the Na-Qiangic languages. The Na-Qiangic languages are spoken in the Western Sichuan Ethnic Corridor of southwestern China. They belong to the Tibeto-Burman or Burmo-Qiangic subfamily of the Sino-Tibetan language family. However, the detailed genetic status and classification of this language group is still controversial.

Na-Qiangic languages have a variety of word forms for “sun,” although “sun” is generally regarded as a basic word. Based on the type of initial consonants, this paper classifies them as [A] N-, [B] B-, [C] M-TS-, and [D] J-. Moreover, [A] is subclassified into [A-i] (Prefix-)n-, [A-ii] Prefix-ŋ-, [A-iii] ŋ-m-, and [A-iv] n-ts-

I have examined this classification, taking the etymology and language contact situation into consideration. Types [A-i, ii] can be traced back to Proto-Tibeto-Burman (PTB) **(s-)nəy* ‘sun / day / dwell.’ Type [A-iii] is a compound consisting of ‘sun / day / daytime’ (PTB **(s-)nəy*) and ‘mother’ (PTB **ma*). This type was calqued on Tibetan, reinterpreting Tibetan words (correspondents of Old Tibetan *(g)nyi-ma*) into a compound of “sun / day” and “mother.” Only one example could be found for Type [A-iv]. Its etymology may be a compound of PTB **g-nam* ‘sky’ and **tsyar* ‘sunshine.’ Type [B] can probably be traced back to PTB **m-ba* ‘shine / bright.’ Type [C] is a compound that can probably be traced back to PTB **r-məw* ‘sky / heavens / clouds’ and **tsyar* ‘sunshine.’ Type [D] originally means “to be sunny” in rGyalrongish languages.

Finally, I have conducted a geolinguistic analysis based on the geographical distribution of the abovementioned types. The result of the analysis is the following hypothesis of relative chronology: [A-i] > [B] > [A-ii], [A-iii], [C] > [D], [A-iv].